

60人のベストファーザー受賞者の言葉の中で、一番共感したのが、カルロス・ゴーン。他の人は、何故受賞したのかわからない、昔ながらの仕事一途の男を描いていて新鮮味がない。(一部主夫的な人もいたが)

●カルロス・ゴーン

**子供の頃から歴史や文化、言葉に興味があって、
将来いろんな国を巡ってみたいというのが夢でした**

子どもの頃、私は国の歴史や文化、言葉にとっても強い関心を持っていて、その頃から将来はいろいろな国に住めたらいいなと思っていました。私はこれまでの人生で南米、中東、北米、欧州そして日本という5つの地域に住み、暮らしてきましたので、文化交流や言葉の習得をしたいという子ども時代の夢は十分にかなえられたのです。

私の両親は私がやりたいことにとっても理解があり、いつもオープンな態度で私に接してポジティブな影響を与えてくれました。また自分自身が父となってみて、親となるのがいかに大変か、そして大きな報いがあると同時に強いフラストレーションを感じるものなのかが、痛いほどわかりました。その意味で両親にはとても感謝しています。

父親になって学んだことは「忍耐」ですが、マネジメントに通じることもたくさんありました。子どもを育てるのにはあまり甘やかしてもいけませんし、かといってあまりに厳しくしてもだめで、いかに良いバランスを見つけるかということだと思えます。

企業のトップと父親業には似たところがたくさんあります。まずは高い透明性を保つことがとても重要です。また、常に、Demanding すなわち要求レベルを高くすることが大切です。また、子どもは、両親がああしろこうしろと言うことをするのではなくて、両親がなすことをするものですから、親が率先して行動で模範を示すことが大事だと思います。常に建設的な態度でいること、相手のことをよく理解しようと努めること、人をコーチすると同時に守ること、これらは皆父親、経営者ともに必要な資質といえるでしょう。

**家庭の運営も企業経営と同じで、コンセンサスを
つくるのがとりわけ大事なことだと思います**

それでは私の家族を紹介します。私の家は、今や日本では珍しくなった6人の大家族です。妻のリタ(年齢は勘弁してくれと申していました)、長女キャロラインが15歳、次女ナディーヌが12歳、三女マヤが9歳。そして長男のアンソニーが7歳です(現在)。

家庭の運営もまた会社経営と同じで、コンセンサスをつくるのがとりわけ大切だと思っています。家族としての重要な決定を行うときには、年齢にかかわらず家族全員を必ずその決定に関わらせるというのが私のやり方です。

たとえば私がミシュランからルノーに移るためにアメリカからフランスへ引越しをしなければならなくなったとき、家族会議を開いて家族全員が自分の意見を出し、話しあいました。どんな不安があるかとか、どんな良いことがあるかとか、いろいろな意見をそれぞれが出し合います。

フランスから東京へ引越すときも同じように家族会議を開きました。そうすることによって家族の間でその転勤に関するコンセンサスもできますし、十分なコミットメントもできました。日本に移るときは「週末は家族を最優先する」といったようないくつかの約束を私自身からしています。こうして家族全員が引越しをポジティブな気持ちでとらえることができたのです。

家庭がうまく機能するためには、まずひとつは、家族全員が「常にベストをつくす」ということではないでしょうか。子どもたちは学校でベストをつくし、母親である妻は家庭をよく運営し、まとめること、そして私は仕事でベストを尽くすとともに、良い夫、父親であるようベストを尽くすということです。“また、私は家庭は個人を確実に成長させていくための場所だと思っています。家庭というのはそれにふさわしく、安全で楽しい場所でなければなりません。

家族とすごせる時間は限られていますので、その短い時間の内容を充実させるように心がけています。平日は朝早いのですが、朝食をいつも家族そろって摂っています。ただ漫然と食べるのではなく、朝食のテーブルで、家族がそれぞれ昨日起こったこと、今日の予定などを話しあい、質問しあったりしてお互いに情報を共有化します。

週末はまず家族が最優先で、ビジネスはその次です。社交上のつきあいはさらに後ろで、決して家族より優先されることはありません。

土曜日や日曜日の夜は寝る前に下の2人の子どもに本を読んで聞かせることを習慣にしています。平日は、家に帰ったときにはもう子どもたちは寝ていますから。

妻が子供達の世話と教育に当たることに決めました。

“夫婦それぞれ本職はひとつだけ”が合言葉でした

私は若いころ教師志望でしたので、家庭における親の分担と責任についてもひとつの信念を持っています。現代の社会は父親も母親も職業に深く携っているため、両親の責任は限定されがちです。これは、子どもたちにとっても、社会にとっても、決して良いことではありません。私たちは最初から、主として妻が子どもたちの世話と教育にあたることに決めました。その係は私でも良かったのです。しかし私たちは本職を2つ持つことを避けました。『本職は1つだけ』というのが合言葉でしたから。これは、父親には責任がない、という意味ではありません。父親が子どものために費やす時間は非常に重要で、たとえ母親にもっと時間があっても、その代役は務まりません。

教育とは、単なる知識の獲得以上のものです。考え方を、理性を、創造性を教えるものです。独立性、自主性を保ちながら、いかにして、ある一つの道を選ぶかを教えるものです。しかし、いかにして他人と共に働くか、チームとして働くかということも非常に重要です。

それと、個人の成長には倫理的な成長も含む、ということを私は重視します。たとえばそをつかない、努力を惜しまない、何か問題があったら隠さずに打ち明けることなども重要な信念として子どもたちに教えています。

最後に父親として子どもたちに対して申し訳ないと思っていることを告白します。それは、思うように時間がとれなくてなかなか子どもの学校行事や課外活動を見に行けないこと。もうひとつは学校の夏休みの間、子どもたちはフランスに帰るのですが、私には仕事がありますので、そんな長い休みはどうも取れないため、しばらく子どもにまったく逢えない時間があることです。

それで、あるとき、朝食の時に無記名で子どもたちに父親としての点数をつけてもらったことがあります。その結果は、なんと80点を大帽に上回る点数をもらえたのです。100点にしなかった理由は、

(1)私が危惧していたとおり)学校行事や課外活動に十分に出席できないこと

(2)学校の成績に対する要求水準が高すぎる(普通の親ならAマイナスであればほめるどころ、なぜAプラスじゃないのかなどと要求する)

ということでした。

自分では80点ぐらいかなと予想していましたので、この数字にはとても満足しています。(談)

【01年度受賞】

●千本 倅生(せんもと さちお) イー・アクセス(株) CEO

一回しかない自分の人生を、他人の手に

ゆだねていいものだろうか。自分の意志で決め、自分で行動し、自分で責任をとって生きてゆくべきである。ビジョンを描き、ゴールを高く掲げ、欲を言えば、常に一割くらいは何らかの形で世のため、人のためになることを忘れないでほしい。子どもに願うのはそんなところだ。

●谷澤 忠彦(たにざわ ただひこ) 弁護士、ルネス学園グループ・代表理事

自主確立の4戒；自分で考え、自分で調べ、自分で決め、自分で実行する。

●松岡 功 東宝(株) 取締役会長

修造は周りがすべてライバルで友人がいまませんから、私は父親であると同時に何でも話を打ち明けられる数少ない親友の1人となっているようです。

=>松岡修造は、テニスのために自分の意思で、慶應高校から九州の柳川高校へ転校した。

●山下 頼充 NHK 厚生文化事業団・副理事長

5つ子は同じような環境で育っても、それぞれ違った個性が芽生えた。